

おが粉敷料の代替に

**高騰
打破**

【三重・伊勢】JA伊勢は、管内の畜産農家に、すりつぶしたもみ殻を代替敷料として試験的に供給を始めた。ライスセンターで処分に困っているもみ殻を活用し、資源循環型農業に取り組む。試験は約2カ月、管内の松阪牛を肥育する3戸と、加茂牛を肥育する1戸の合わせて4戸に約300kgずつ、すりつぶしたもみ殻を供給する。

もみ殻はそのまま使用せず、「グラインドミル」ですりつぶしたものを使用する。すりつぶすことで吸水性・保温性が高まるため、敷料としての機能も高くなる。

試験する敷料は、①おが粉100%②おが粉とすりつぶしたもみ殻を半量ずつ③すりつぶしたもみ殻100%の3種類で、耐久性などを比較して調べる。同JAでは、定期的に

すりつぶしもみ殻 供給 三重・JA伊勢が耐久性調査



すりつぶしもみ殻を牛の敷料にする生産者
(三重県鳥羽市で)

生産者の意見を聞き取りながら、活用マニュアルを作成していく。

管内は松阪牛など肥育が盛んな地域で、ほとんどの畜産農家が牛の敷料に、おが粉を使用している。しかし、「ウッドショック」などの影響を受けて国内

全体でおが粉が不足しており、畜産農家に打撃を与えている。そこで同JA営農部では、ライスセンターで処分に困るもみ殻を代用できないか考えた。

すりつぶしもみ殻を生床に敷く試験に協力する、鳥羽市河内町の木田三男さんは「もみ殻だけだとすぐに吸水性がなくなるが、すりつぶしたもみ殻だと、

どのくらい耐久性があるのか試してみたい」と話す。

同JAの担当者は「処分に困っていたもみ殻を再利用することで、おが粉の価格高騰に苦しむ畜産農家を少しでも助けられれば」と話す。

同JAでは、試験結果を基に「グラインドミル」を導入する予定だ。すりつぶしもみ殻と同時に、固形燃料「モミガライト」も作成して、アウトドア需要に合わせて、管内の直売所などでの販売を検討している。「モミガライト」は、災害時の備蓄燃料としての活用も視野に入れている。